様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ５ 月 ２６ 日現在

機関番号：３２５０８
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2013～2015
課題番号：２５３７０３６８

研究課題名（和文）「文芸の共和国」としてのプランタン＝モレトゥス工房の総合的研究ー第三期

研究課題名（英文）General Study on the Officina Plantin-Moretus, a Center of the Republic of Letters-the Third Stage

研究代表者
宮下　志朗（miyashita, shiro）

放送大学・教養学部・教授

研究者番号：６０１０８１１５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,500,000円

研究成果の概要（和文）：「プランタン＝モレトゥス工房」は、フランスからアントウェルペン（アントワープ）に移住したクリストフ・プランタン（1520?-1589）が立ち上げた出版工房で、16世紀後半から17世紀前半にかけて、ヨーロッパ随一の規模を誇り、いわばヨーロッパの出版センターとして繁栄します。工房は出版物はもちろんのこと、活字・版木・道具類なども、その建物と共に非常に大切に保存されてきました。そして2005年には「世界文化遺産」に指定されて、ますます注目を浴びるようになっています。そこでわたしは、「文芸の共和国」という切り口により、ネットワーク上の作家（モンテーニュ、リプシウス）や、プランタンの活動を考察しました。

研究成果の概要（英文）：The Officina Plantin-Moretus is a famous printing-publishiong company founded at Antwerp by a Frenchman Christophe Plantin(1520?-1589). The Officina flourished as the greatest printing-publishing center, from the second half of the 16th century to the first half of the 17th century. Not only the publications, of course , also , such as type , woodblocks , equipment etc, everything has been very carefully preserved along with the historical building . And in 2005, the Officina was specified in the " World Cultural Heritage " , it has become more and more the focus of public attention. So I , by the cut of " literature of the Republic " , made a study of some writer's activity on the network (Montaigne , Lipsius) and the publishing politics of Christophe Plantin.

研究分野：ルネサンス文学

キーワード：ルネサンス　ユマニスム　文芸の共和国　出版文化　クリストフ・プランタン　ラブレー　モンテーニュ　世界文化遺産

１．研究開始当初の背景：

研究者は、以前からアントウェルペンの「プランタン＝モレトゥス博物館」と呼ばれる、16 世紀後半から 17 世紀半ばに頂点をきわめた印刷・出版工房に注目して、調査を始めていた（最初にここを訪れたのは 1991 年である）。たまたま、「プランタン＝モレトゥス博物館展」（2005 年、東京、印刷博物館）の実行委員として、この博物館の資料の探索・研究に深くかかわることになった。そして折しも、2005 年には、プランタン＝モレトゥス博物館はユネスコの世界遺産にも登録されたのである。こうした背景もあり、このプランタン＝モレトゥス印刷・出版工房について、「文芸の共和国」のひとつのセンターというイメージで研究するとともに、文化資源としてのこの博物館の重要性について、もっと広く知らしめる必要があることに思い至った。

２．研究の目的：

工房の創業者であるクリストフ・プランタン(1520?-1589)はフランスからの移住者した製本技術者である。

自身の負傷により、製本から印刷・出版へと方針転換したプランタンは、当時の国際都市アントウェルペン（「大航海時代の数々の発見によって、世界の軸が移動した結果、ある朝、ふと目覚めたら頂点にいた」と、ブローデルは都市アントウェルペンを形容している）を拠点として、「ユマニスム」にもとづく全方位的な知的・人間的なネットワークを築いて、ヨーロッパ規模で、「書物」という精神の所産を、「商品」として企画・制作・販売していった（もっとも有名なのが『多国語対照聖書』である）。その工房は、ヨーロッパの知識人たちのつどう「文芸の共和国」としてイメージすることができる。モンテーニュも、書簡は残されてはいないが、プランタンの存在をよく知り、『エセー』のなかで取りあげてもいる。プランタンの膨大な『書簡集』は、そうした知のネットワークの様相を教えてくれる。未刊行の「家事日記」を含めて、プランタン関連の資料を読み解き、さらには、共和国ネットワークとつながる、フランドルの偉大なユマニストのユストゥス・リプシウス（『エセー』の作者との関係が深い）などの研究を通じて、16 世紀後半から 17 世紀にかけての「文芸の共和国」の実装を少しでも明らかにすることが目的であった。

また本研究と深く関連する、「翻訳」という実践態においても、いくつかの目的を設定した。

まずは、プランタン＝モレトゥス博物館所蔵の『エセー』1595 年版（グルネー嬢による加筆訂正版である）を調査して、進行中の翻訳（白水社）に、その成果を活用することである。

次に、本研究者の主導により実現に移されたところの『フランス・ルネサンス文学集』全 3 巻(これも白水社)を完成に導くことも、大きな目的であった。

最後に、時間的な余裕があるならば、クリストフ・プランタンに関する単著をまとめたい、少なくともその目処だけはつけたいという気持ちもあった。

３．研究の方法：

・基本資料の入手と読解。
・アントウェルペンのプランタン＝モレトゥス博物館における調査。
・フランス国内のプランタン関係の土地の実地調査。
・関連する著作の執筆、そして翻訳の実行。

具体的には、プランタンやリプシウスの『書簡集』、プランタンの「家事日記」といった資料の読み込みと、実際の出版物の調査など、書誌学・書物史の知見を生かした地道な方法を採用した。

４．研究成果：

・『書簡集』は全 8 巻＋補遺 1 巻という大部なものであるが、ほぼ読解を終えることができた。「家事日記」については翻字が困難な個所も多いが、全貌をつかむことができた（きわめて実務的な内容であることを確認した）。
・プランタン＝モレトゥス博物館発行の研究雑誌である De Gulden Passer（黄金のコンパス）〔「黄金のコンパス」とは、プランタン＝モレトゥスのプリンターズ・マーク〕のバックナンバーは、日本国内にはほとんど所蔵されていない希少な雑誌なのだが、これを探して、入手することができた。ただし、『書簡集』の読解で手一杯であり、本雑誌の系統的な繙読には至っていない。

・プランタン刊行の『フランドル語・フランス語対照ことわざ辞典』（1568 年）を実地に調査したところ、ラブレーからの引用が複数存在して、そのことが記載されていることが判明した。これは小とはいえども、「ラブレー学」における新発見であった（これは第 2 期の成果である）。「ことわざ」との関連で、このことを先ず、《ブリューゲル版画の世界》展覧会のカタログに論文として発表することができた（日本語ならびに英語）。
・本研究と深く関連するところの、モンテーニュ『エセー』1595 年版（既述のように、編者グルネー嬢による書き込み版が、プランタン＝モレトゥス博物館に所蔵されており、これを複数回、実際に調査した）の全訳を、12 年間をかけてようやく完成させることができた（2005-2016）。
・編者代表をつとめる『フランス・ルネサンス文学集』全 3 巻に関しては、共同編者である平野隆文元立教大学教授の死去（2015 年 2 月）という悲しい出来事があったが、これを

乗り越えて、第 1 巻、第 2 巻を上梓することができた。そして現在、第 3 巻を鋭意編集中である。

・最後になったが、クリストフ・プランタンに関する単著も、当然ながら、本研究の大きな目的であったことは上にも記したが、予想されたこととはいえ、『エセー』の翻訳・註解などに時間を取られ、研究期間中に単著を完成させることはできなかった。雑誌 De Gulden Passer にまだ手を付けていないことが大きい。今後の課題としたい。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　1　件）
Traduire Rabelais et Montaigne, 『立教大学　フランス文学』42 号、立教大学フランス文学研究室、2013 年、pp.23-45.〔2012 年 6 月開催の日韓シンポジウム「アジアに於ける仏ルネサンス文学の受容」（立教大学、太刀川記念館）でのフランス語による発表の活字化である。韓国からは、高麗大学の孫周卿 Sohn Joo-Kyong 教授が発表した〕

〔学会発表〕（計　2　件）
・「翻訳者の使命―古典の継承のために」、日仏会館創立 90 周年記念国際シンポジウム（2014 年 4 月 19 日～20 日、日仏会館）での発表。〔日本からは西永良成、三浦信孝、吉川一義、西谷修、湯浅博雄氏など、フランスからは坂井セシル、アンヌ・バヤール坂井、パトリック・オノレ、エマニュエル・ロズラン氏など、多数の専門家が参加した。本国際シンポジウムは、『日仏翻訳交流の過去と未来』として、活字化された〕

・「翻訳家の仕事―ある 16 世紀研究者の歩み」、日仏翻訳文学賞第 20 回記念シンポジウム（2015 年 7 月 11 日、日仏会館）での基調講演。〔作家の荻野アンナ、フィリップ・フォレスト、堀江敏幸、それに野崎歓、澤田直氏などが参加した。活字化が進行中〕

〔図書〕（計　6　件）
・『日仏翻訳交流の過去と未来』西永良成・三浦信孝・坂井セシル編、大修館書店、2014 年 11 月、322p.（宮下志朗「翻訳者の使命―古典の継承のために」pp.6-18）〔上記の「日仏会館創立 90 周年記念国際シンポジウム」を活字化したものである〕

・『フランス・ルネサンス文学集１』宮下志朗・伊藤進・平野隆文編訳、白水社、2015 年 3 月、572p.〔宮下は、編者代表として、「まえがき」「あとがき」を執筆。そして、ボナヴァンチュール・デ・ペリエ『キュンバルム・ムンディ』(pp.7-68)の翻訳・註解を担当した〕

・『フランス・ルネサンス文学集２』宮下志朗・伊藤進・平野隆文編訳、白水社、2016 年 3 月、610p.〔編者代表である。ルイーズ・ラベ『フォリーとアムールの諍い』の本邦初訳と註解(pp.103-184)を担当した〕

・モンテーニュ『エセー６』白水社、2014 年 12 月、342p.〔『エセー』第 3 巻の１である。拙稿「『エセー』の「特認」をたどる」(pp.325-338)を収める〕

・モンテーニュ『エセー７』白水社、2016 年 3 月印刷・4 月発行、374pp.〔『エセー』第 3 巻の２であり、これをもって 1595 年版『エセー』の全訳が完成した。巻末の「モンテーニュ略年譜」では、意識的にグルネー嬢関連の項目について詳しく既述してある〕

・『マルセル・シュオッブ全集』国書刊行会、2015 年 6 月、934p.〔小説家シュオッブは、ヴィヨン研究者としても著名であったが、「フランソワ・ヴィヨン」(pp.651-706)の本邦初訳をおこない、註解を付した。これ以外にも、中世・ルネサンスを舞台にした短篇数編も翻訳した〕

〔産業財産権〕
○出願状況（計　０　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　０　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織

(1)研究代表者
宮下志朗　　（MIYASHITA SHIRO）

放送大学・教養学部・教授

研究者番号：60108115

(2)研究分担者：なし
(　　)

研究者番号：

(3)連携研究者：なし
(　　)

研究者番号：